三、再び疑問

一　維新の外交と現在の外交

中学二年の私は、戦争に対する責任は一切ないと確信しておりますが、しかし、にもかかわらず、そこで転向を強いられた。誰がそういう事態を起こしたか、という怨念のようなものがありまして、それをたどっていきますと、どうやら近代のスタートの時点へ行くと思います。その時点におかしいものがあって、それがあった為に、昭和二十年八月十五日が来た、その為に私は転向をさせられたし、凌辱感をもたされた、と思ったわけです。そういう問題意識から、私は日本の近代史というものに、少し興味をもって、いろいろなものを読んだ、ということであります。

例を申し上げてみたいと思うのですが、明治四年秋に、ある事件が起こりました。どういう事件かといいますと、南米ペルーの貨物船が横浜・本牧(ほんもく)岬の沖合で、暴風の為に座礁します。至急乗組

員は救助されます。貨物船でありますので、乗組員を救助して、あとの荷物はしようがないだろう、暴風が去った後で、ということであったのですが、いろいろ事情を訊いてみると、どうやら貨物船の中には人間がいるらしいことが分りまして、直ちに神奈川県令は役人を派遣して、その船を調べるわけです。そうすると、船の中には貨物は全然なくて、何百人という人間が乗っていた。その人間は、全部中国大陸から北米大陸へ買われてゆく、中国人の苦力、奴隷であったということが判明します。神奈川県令は、直ちに荷物と称されていた苦力たちを救出します。いろいろ事情を調べてみますと、奴隷として買われてゆき、当時北米では大陸横断鉄道が造られていたのですが、その労働力として買われていた。

時の県令は誰であったか、記憶が定かではありませんが、県令は直ちに収容して、その結果直ちに中国本土、当時は清ですが、本国へ送還せよということで、一方的に送還するわけです。その結果、ペルーと日本との間にかなり緊張がたかまります。ペルーは、これを国際裁判へ訴える、というところまで発展するのですが、国際裁判で日本がとった処置が認められます。ペルーは抗議を退けられる、という結果になります。そのとき明治四年の政府がとった態度は、細かく調べると、イギリス大使が指嗾したとかいろんなことがあるようですが、しかし大むね、奴隷を釈放して直ちに清へ送り返したということは、大変爽やかな外交的処置であったと、私は思います。

ところが皆さんも記憶に新らしい、今から二年前、東京のパレスホテルで、八月の白昼、隣の韓国から日本へ来て滞在しておった金大中氏という人が拉致されました。

二日後、傷だらけの身で韓国の自宅に戻ったということでありまして、その間の経緯は新聞が報道した通りであります。明らかに韓国のある機関が、これを実行したのでありましょう。考えてみますと、金大中氏は、日本という法治国家に、旅行者としてビザを支給されて滞在しておったわけです。法治国家日本は、旅行者金大中氏の、理由は如何にあれ、安全を保障しなければならない義務があります。それが、法治国家の機関以外の者から拉致をされて、連れ去られたということです。

それに対して、どういう外交的な処置がとられたかといいますと、皆さんがご存知の通りです。今年の八月、非常に曖昧な形でピリオドが打たれたということです。少なくとも基本的外交措置としては、金大中氏を元の状態に戻す、そこから話し合いを始める、というのが外交的な、まず行なわなければならなかった措置だった筈で、それが行なわれない。実に後味の悪い、爽やかさとは全く反対の感じであります。

なぜ、百年前の日本政府は、今、思い起こしてみても爽やかな措置がとれて、一九七〇年の我が国では、そういうことがやれなくなったか、ということを考えざるを得ないわけです。

二　旧制中学在学中

私は、先程申しましたように、昭和二十年八月十五日を境にして、日本は違ったな、と思ったのは錯覚でありまして、どうやら、ずっと同じものが続いておるというような感じがしております。

最初この国の近代のスタートの時に爽やかだったのが、何時、どういうふうにして、爽やかでなくなって現在に至っておるのか、というふうに問題を把え直さなきゃいけないか、と最近は思い直してもおります。

それで、我が怨念のごとくになった凌辱感を拭う為に、歴史を遡り、近代の初めに私の関心が向いていったということです。

そこで秩父事件が登場してくるのであります。私は長野県の南佐久という所に生まれました。地図を思い描いていただきたいのですが、南佐久というのは、長野県の一番東隅にあたります。山を隔てて、群馬と一部分埼玉に接しております。その三つが重なり合う所に、三国峠という所がありまして(全国至る所に三国峠というのがありますが)、三つの国が重なり合っている峠であります。そこの接している所が南佐久郡でありまして、山奥です。風光明媚な所でありますが、今でも、いっこうに近代化の恩恵に浴していません。そのことは大変いいことだと思っております、一度是非お越し下さい(笑)。

その南佐久郡の郡役所が、私の生まれた臼田町という所にありました。今、地方事務所ということになって、有名無実の機関になっております。その臼田町には警察署、営林署、裁判所の出張所、その他南佐久郡のいろんな役所が集中していました。まあ、郡の中心地です。その隣に、野沢町、中込町があり、この三つの町のほかは全部「村」でした。

当時の旧制中学というのは、郡全体から何人かずつ行くのですが、村でいうと一人か二人、今い

った町でいうと、大体五、六人、全部で百人位が来るのですが、そういう中で、私は秘かにライバル意識を燃やしまして、野沢町、中込町よりも我が臼田町は偉いんだ、とこう思っておったわけです。なぜならば、警察署がある。なぜならば郡役所がある等々。その上臼田町には本屋が二軒ありました。野沢町には一軒ありましたが、中込町には本屋はない、そう軽蔑しておりました。月々、その本屋に『少年倶楽部』が届きます。ノラクロを愛読しておった私は、すぐに買えます。本屋のない中込町のやつに向けて、ザマァ見やがれとこう思っていたわけであります(笑)。

ましてや南佐久にはたくさん村があります。南半分は全部村で、イタリアのようであります。北半分が開けておりまして、南部は停滞しております。南部の村からは、一人か二人しか中学にやって来ません。来た場合も、学力において若干の差があるようであります。町場の子供の方が、こましゃくれております(笑)。教育水準が高い、と私はこう思ったのであります。ところが、そういう村から来る人たちは、一年の間は冴えないけれども、二年、三年となるに従って頭角を現わしてきて、むしろ町場よりも優秀になっていきます。ケシカランと私は思っていました(笑)。

南佐久の一番奥に、相木村という所がありました。その村は二つに分れておりまして、南相木村と北相木村とになっておりました。南相木村からは、私の同級生では、確か一人も来ておりませんでした。北相木村からは一人来ておりました。菊池という男でした。私は、この四月に同級会で、たまたま二十年振りかで会いまして、「おい井出、お前は俺の曽爺さんの事を書いておるな」、といわれてドキッとしたのでありますが(笑)、その菊池なる者は、我が秩父事件の参謀長、菊池貫平の曽

孫でありました。

三　父親が語った秩父騒動

北相木村は非常に山の中であります。

江戸時代以来、人口が増えておらぬようであります。今も大して変わらないでしょう。そういうふうに、私は臼田町に育った為に、長い事、秩父事件というものがわからなかったわけです。私は子供の頃から秩父事件について聞いておりました。というのは、私の父親が明治十三年の生まれです。秩父事件は明治十七年です。大分前に亡くなりましたが、満四歳の時ということで、父親は憶えておりました。当時私の村から、隣の大沢村という所の山奥にある小さなお寺に避難をしたという話を、私の子供の頃、よくしておりました。私の家が商売をやっておりましたから、店員さんに背負われて避難したということでした。

当時、秩父騒動といっておりました。秩父暴動ともいいませんでした。「『暴徒』がやってきてなあ」といっておりました。どこまでやって来たかといいますと、臼田町のすぐ隣に宿岩という所がありますが、そこまで暴徒が来てなあ、みんな書類だとかを持って太沢村に逃げのびた、という話でした。もし宿岩から更に山を越えて、私の出身地の臼田町まで来たとすれば、私の家は高利貸はしておりませんでしたので、焼き打ちには会わなかったとは思いますが、しかし、商売はしておったので、米を出せとか、金を出せとかいわれて、出さなければあるいは門ぐらい壊されたかもしれないという、そういう立場です。そこで緊急避難をしたのでありましょう。「暴徒」と呼ばれていた人たちとは対立する立場にあったわけです。にもかかわらず、その懐古談の中で、私の父親は、暴徒は山を越えてやってきた、しかし、その手引きをしていたのは佐久の人間であって、その主な者は、菊池貫平、井出為吉という人だ、といいました。私の子供の頃の話です。昭和十二年頃のことです。その時に私の父は、菊池貫平様、井出為吉様、という敬称を使いました。「様」というのは、京都で使う、公卿さんが使う様とはいくらか違います。田舎の「様」とは、ちょっと親しみを籠めた、旦

Ⅰ－6　高利貸を焼く困民軍（戸井昌造画文集『秩父』より）

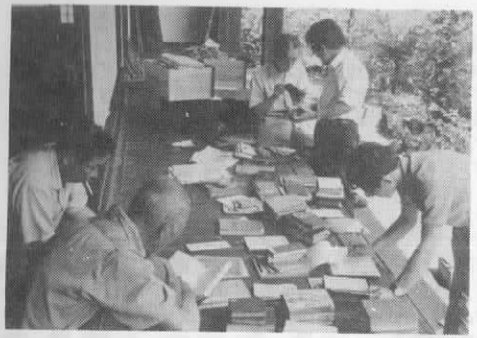
那、みたいな言葉として使われるのですが、そういう敬称をつけて、菊池貫平様並びに井出為吉様のことを、私に話してくれた記憶があるのです。

戦争となって、私は先程のようなことで軍国少年になりましたから、秩父事件のことは毛頭、頭に無かったけれども、敗戦とともに、平和少年に転向して暫く経ちましてから、秩父事件のことをもう一度思い起こしてみたわけです。その後、秩父事件のことは西野辰吉さんの小説が出たりして、漠然とながら事件の概要は知っていきました。しかし何とも分らないことが秩父事件の中にありました。つまり、私の父親は、あまり人を誉める人柄ではなく、いつもけなしているような人物でありましたけれど、その親父が菊池貫平様といい、井出為吉様と、いささかの敬愛の情を籠めた言葉を使ったことが、私にはどうも納得できなかった。その二人は共に北相木村の出身だったわけです。その時、「あれは大変な騒動で、この南佐久郡はひっくり返るようなことだった」と、思い出話をしながら、「様」を使ったわけです。

その後私はこの明治の歴史を繙いて、自由民権の運動というものをいささか理解するなかで、それが当時の政治意識の中では、少なくとも最先端の思想だったことがわかりました。そういう最先端の思想が、南佐久郡の中心である臼田町に、なぜ発生せずに、一番山奥である北相木村にどうして生まれたのであるか、一向に分らないわけです。我が同級生である菊池君の所で自由民権があって、私の町で自由民権が無かった、おかしいではないか、とこう思っていたわけであります(笑)。

四　なぜ山奥に自由民権運動が……

明後日来られる色川大吉さんも何度か北相木村に足を運んでおりますが、その色川大吉さんが、秩父事件の研究の第一人者であられる井上幸治先生と二人で、先年その北相木村にいらっしゃいました。



Ⅰ－7　井出為吉資料調査をする色川氏(右端)と井上氏(右から3番目)

北相木村では、明治から大正にかけて二度程大火があって焼けておるようですが、井出為吉さんの土蔵がたまたま焼け残っておりました。その土蔵を一度見せてくれといわれておりまして、お二方が行かれた。初めてその土蔵が開かれて、中からつづらのようなものが出てきました。それは錠が錆びついておって今まで開けたことがなかったそうでした。色川さんは、いつも焼け残った土蔵へ入って、つづらを開ける趣味があって(笑)、私が先にやればよかったんだけれども、先にやられてしまったのでありました(笑)。

そのつづらを開けたところ、微かなるカビの匂いが立ちのぼり、その中から、七十点にわたる書物が出てきた。そ

れは、為吉が秩父事件に参加する際に錠をしたまま、錆びついてしまったのだろうと思いますが、若干違うみたいですね、その後のものも少し入っていたから(笑)、その後で錆びついたのかもしれないですが、まあ文学的に表現して、秩父事件に参加した時に閉じてしまって、そのまま開けられなかったものだとしましょう(笑)。その七十数点を出してみると、中には明治八年から明治十六年にわたる八年間、当時東京で出版された重要な書物が入っておった。その中には、『フランス革命史』であるとか、ボアソナードの『性法講義』であるとか、その頃、あたう限りの新しい翻訳された書物が入っておったということが分りました。

それが分って、私の憤懣は昂まりました。けしからん、我が臼田町において自由民権運動が発生せずに、どうして、あのチベットのようなところで自由民権運動が湧き起こったのか、と一層分らなくなりました。

そこで私は、一度ともかく秩父へ行ってみようと思いました。実は、私はその頃まで、一度も秩父へ行ったことがなかったのです。秩父というのは、大体観光地であって、学生時代からハイキングに行く機会があったのですが、私はいつも秩父なんぞには行く気がない、その分図書館に行った方が良いなどと生意気なことをいって、そんな遠足をサボったのであります。

五　実際に山を越えてみた

従って六年前、初めて秩父へ行ってみようと思ったわけでありました。それまで私はある出版社に勤めておって、大変忙しかったものですから、その反動で、辞めると大変サバサバして、したいことをこれからはしようと秘かに思ったのです。一番最初にしたいと思ったのは、一番わけのわからない秩父事件を、ちょっとやってみたい、その為には、とにかく秩父へ行ってみたいと思ったのであります。

秩父へは、単なるハイキングのような恰好で行くのはよくない、どうせ行くなら、我が郷里から秩父は山の向こうであるから、完全武装して(笑)、あの山を越えようではないか、そのくらいの変わったことをしてもよいのではないか、と思ったのであります。で、まず秩父へ行きまして、そこから井上幸治先生の『秩父事件』という本をたよりにしながら、明治時代の五万分の一地図を探したのですが無くて、大正時代のものが手に入ったので、大正時代と明治時代ではさほど変わらぬであろうということで、その参謀本部の五万分の一地図を携えて、秩父から峠をいくつか越えました。三泊四日かかって秩父から佐久へ歩いて抜けたわけです。途中、天は我が志を試すがごとく(笑)、ドシャブリの雨でありまして、ついにパンツまで濡れました(笑)。

三泊四日、そういう難業苦業の果てに(笑)、峠を越えてみたわけです。峠を越えた結果、ともか

く私の中に微かなる満足感が生じました。我が惰弱なる足でも、とにかく三泊四日をかけて、あの峠を越えられたではないか、我輩も、井出為吉、菊池貫平に劣らないなあ、我が脚力はたいしたものだと、最初はそういう自己満足にふけっておったのであります。

そのうちに、ふと気が付きました。たとえ三泊四日かかっても、佐久から秩父へ行くのに非常に近いなあという感じが、二、三日してから実感として湧いてきました。ともかく、自分の足で歩けるじゃないかと、こう思ったわけです。

四、近代の把え直し

一　当時のリアルな距離

ところで、私の町から東京へ出るには、今どういうコースをとるかというと、小海線というのを通りまして、小諸という駅へ出て信越線で東京に行くか、あるいは小海線で逆に中央線の小淵沢という駅に出て、そこで中央線に乗り換えて東京へ出ます。

私の子供の頃には、私の町から東京へ出るには、七時間かかったわけです。今は、四時間、もっと短かい、三時間ぐらいで行きますが。七時間かかったけれど、ともかく一日で行かれる距離である。ところが、北相木村から私の町へ出て来る、それに半日位かかっちゃうわけです。それから臼田町から小諸へ出て、東京へ行くには本当に一日がかりになるわけです。つまり、東京に対する距離というのは、私の所と北相木村とは、半日近くの時間差があると思ってました。ところが秩父を

I－8

山越えして北相木村まで行ってみますと、三泊四日かかったけれども、とにかく、歩いた実感としてはかなり近いという感じがするわけです。山登りした時には、もう金輪際来たくないと思いますけれども、暫くするともう一度登りたくなる。もう一度登りたくなるというのは、歩いてみて、自分の中に歩き通したという実感があって、そういう実感をもう一度味わいたいという気持から、もう一度ということになるわけですが、それと同じように、私の中で秩父から北相木村まで行ったということは、非常に近い感じとして残った。その時、はたと思い当ったのですが、さっきいいましたように、私の生まれた所から東京へ出るのに当時七時間かかったけれども、明治十七年にはどうだったかな、ともう一度思い返してみたのであります。そしたら北相木村から秩父へ出て、秩父から東京に行くコースと、それからもうひとつは、小諸へ出て、それから中仙道を通って東

京へ出る、という二つのコースがあるわけですが、距離的な点と、道の良し悪しの点からいうと、むしろ北相木村から秩父を通って東京へ行く方がはるかに距離は近いし、それから碓氷峠のような険しい所はない、とすれば、むしろ北相木村から当時東京の方が距離としては近かった。そういうことだと思うんです。

そうすると、明治十七年当時には、どうも私が誇っておったように、東京から文化的に一番距離が近い臼田町、というのはなかったのではないかという感じがしてきたわけです。

二　中央志向性と地図

信越線の開通は、明治二十四年でありますから、私の教えられた地図、つまり臼田町が中心で北相木村はチベットである、という地図は、明治二十四年以後信越線が開通して東京に繋がるということの中で作られてきたわけです。

そうすると、あとは非常に平易に方程式は解けるわけで、北相木村の井出為吉の蔵の中に、当時最も先進的な書物が残されていたことは、実は臼田町よりも近い所に北相木村があったということであり、北相木村は当時かなり養蚕業で栄えて、その養蚕から得た生糸をかついで、峠を越え、東京、八王子、あるいは横浜に出していたのです。井出為吉はおそらくそういう形で、八王子や横浜に出て、東京に立ち寄って書物を買って戻ったのであろうということが、かなり自然なこととして

私の中で理解されてきたわけです。

そうすると、私が学んだ地図というのは、どうも明治二十四年以後のものである、すべて東京を中心にした、つまり日本の中心が東京である、南佐久の中心は臼田町であると。つまり、中央志向に彩られた地図というのは明治二十四年以後のことであって、それ以前はまったく違った地図で考えられなければならないと思ったわけです。

仮りに信越線を例にとると、明治二十四年以後と以前は違う。日本のいろんな所もおそらく、つまり象徴的な時間でいえば、明治二十四年の前と後では、地図はかなり違うという感じがしてきたわけです。そういう違った地図の中で秩父事件というものを、もう一度見直さなければならないだろうという気がいたします。

三　多様性の先細り

ここにお集まりの方は秩父事件の、かなりの知識を持っていらっしゃるだろうと思いますので(笑)、あまり内容については触れてきませんでした。

明日は森山さんが、共同体との関係でお話しするようですし、明後日は色川さんがナショナリズムとの関係でお話しするということで、私は本日、近代化との関わりで申し上げているのですけれど、なかなか近代化との関わりが出てこないで困っているわけですが(笑)。そのように多様なテーマで秩父事件が語られるように、実に多様なものが、あの中にあります。

残念ながら、その後のこの国の変革の運動というのは、秩父事件に比べると段々先細りになってきておる、という感じがまぬがれません。

明治二十四年以前の地図の中で考えてみて、それ以後の地図の中では、そういう秩父事件の多様性は、首を段々締められてきた歴史ではないかな、というふうに思われます。それでは、なぜ、この秩父事件の中にある多様性というものが段々先細りになっていったのか、というと、そこには、ひとつこれは後で詰めて議論をしてもらってもいい問題だと思いますが、ひとつには教育という問題があるように思います。

四　電信柱をぶちくじく

秩父事件の中で活躍する人の中に、小柏常次郎という人がいます。

この人はなかなか面白い人ですが、その小柏常次郎の言動について語った、大野福次郎という人の陳述の中に、常次郎が事件より十日程前に、いよいよ全員蜂起である、ついては、「まず、最初に電信柱をぶちくじこうではないか、それで秩父から熊谷の方向へ押し出していこう」、というようなことを口ずさんだというところがあります。

「電信柱をぶちくじく」、非常に衝撃的な言葉であります。ちょっと乱暴狼藉というような言葉を

連想するような発言であります。そのことが、その後どうも秩父事件は乱暴狼藉を働いた、つまり暴徒ということに結びつけられていく、ひとつの材料であるような言葉であります。

同じようなことを菊池貫平は、もう少しスマートにいっております。「電信機械等を、使えなくするよう」「破壊して」、といくらか近代的にいっております（笑）。しかし、ことがらは同じことであります。

北相木村の昭和の初めの村長さんをやった人で、山口粂之祐という人がいます。調べてみると、この山口粂之祐という人は、明治十七年においては僅か十九歳だったのです。この山口粂之祐も、実は菊池貫平、井出為吉と共に、秘かに山を越えて秩父にやってきておりますが、裁判記録によると、途中で、粂之祐の親父様が、あわてふためいて峠に駆け登ってきて、それでせがれの首をつかまえて、行ってはならぬと押し止めた為に親子ともども峠の途中から引き返してきた、というふうに裁判記録に申し立てております。親父も相違ございませんといっております。その為に当時の裁判所は、そのまま、そうか、といって粂之祐には二円の罰金のところ、十九歳である為に一円五十銭にけずっておるのですが、その山口粂之祐が、実はもう一度犯罪を犯しております。明治十八年五月のことです。北相木村に残っている犯罪人処断名簿というのを見ますと、明治十七年に秩父事件でひっくくられ、一円五十銭の刑を科された粂之祐は、翌年の五月にもう一度ひっくくられておるのであります。そして罰金を科されております。

何で罰金を科されたかといいますと、徴兵拒否であります。確かに山口粂之祐は、明治十七年十

九歳、翌年二十歳、兵役年令であります。彼はおそらく、兵役を拒否したのでありましょう。その為に再び罰金を科されております。

多分、山口粂之祐が裁判記録に陳述したことは嘘であって、大体親父が峠まで追っかけて行って、息子に追いつく筈はないわけであります。息子はすでに秩父に行っておったわけだし、おそらく親父も一諸にいたのではないかと私は思っておりますが、そうではないというふうに裁判所で認定されたことは、二人にとっては非常に幸いだったわけです。

その山口粂之祐が昭和の初期に村長になり、その頃、北相木村に共産主義運動が入ってきて、村の若い青年たちは、一生懸命共産党のビラを電信柱に貼っておったそうであります。そしたら、その山口粂之祐老人がカンラと笑って、「お前たちは電信柱に紙キレを貼ることで革命ができると思っているのか、電信柱はくじかなければ革命は起こらないぞ」（笑）といったというわけです。それは信州の御葉漬けをつつきながら、茶飲み話に、山口粂之祐村長がいったのでありましょうけれど、しかし、私はそれを聴いたときには、相当迫力のある言葉として受け止めたわけです。

語り伝えられている山口村長の、革命は「電信柱をくじかなければならない」という言葉と、裁判記録の中に出てくる小柏常次郎の、「電信柱をぶちくじく」という言葉と、菊池貫平の「壊してやろう」といったこととは、すべて一致するわけであります。

そこで、これも疑問であったわけです。なぜ、口を揃えたように、皆、「電信柱をくじかなければならない」というのであろうか。私は、その言葉が不思議で、少し資料を漁ってみました。すると、

たまたま便利なものを、税金を使って郵政省が出してくれました。『関東電信電話百年史』、膨大な厚い書物であります。誰も読まないものであります(笑)。三巻にわたっておりまして、それでも読むべき人が読めば、意味が出てくるということでもあるようです(笑)。私は郵政省の図書室で借り出して読みました。そしたら、その中に、なんと「秩父事件と電報」という一章が設けられております。電々公社のお役人が書いたものです。数ページにわたって、克明に書いてあったのです。いかに電報が秩父事件に役立ったかということです。

その中に統計がありました。明治十六年十一月と、十七年十一月、つまり対前年比で、十七年の電報量は、確か七千だか八千だか多いのであります。次の十八年は、そんなに伸びてはおりません。従って十七年十一月は異常に伸びておるわけであります。全部が全部そうであるとは限りませんけれども、その七千なり八千なり、対前年比で増えた分のかなりの部分が秩父事件に使われたと思われるので、ついでに、その貴重で便利なる『関東電信電話百年史』を繙いてみて、私は一層驚きました。

この国に、ツーツー・トントンの機械が持ち込まれたのは、ハリスが浦賀に来た時、アメリカ大統領の将軍に対する贈り物としてきたのです。安政年間のことであります。それから明治維新までは、確か十数年でありましょう。ところが驚いたことに、その十数年後の明治二年には、初めて電報というものが、もうこの国で打てるようになります。で、明治二年に、東京と横浜の間に電信柱が建ちます。横浜・東京というのは、横浜にすべての国際情報が入ってきて、それを直ちに太政官

府へ伝えなければならない。それから生糸、あるいはお茶というような商況を、できるだけ速く東京の日本橋の商人に伝えなければならない。そういうことがあって、東京と横浜との間に開かれたのであります。

五　権力と電信網

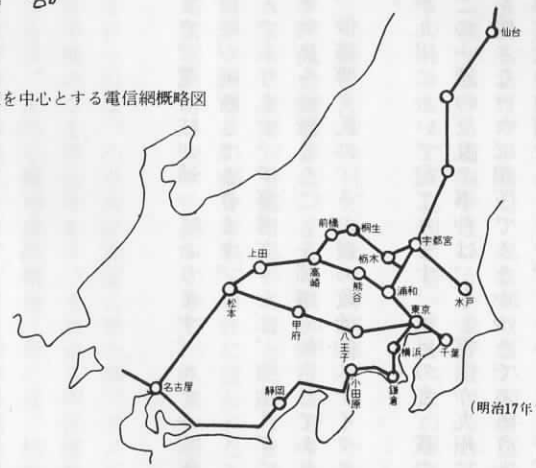
それから明治八年までに、熊本・長崎から札幌まで、電信柱が通っております。わずか六年であります。その間に、東海道に始まって、日本を電信柱が縦断しております。

この猛烈作業を陣頭指揮したのが、伊藤博文さんであります。伊藤博文さんは、明治八年には通信卿でありました。で、得意になって、電信が日本列島を縦断したことを閣議で報告しております。おそらく、その実績がかわれたのでありましょう、伊藤博文氏の、その後の政治的ステイタスは固まっていくのであります。

というのは、明治十年までに、一連の騒乱事件が九州において起こります。秋月の乱、萩の乱、神風連の乱などで、最後が西南の役であります。この一連の反乱の事件は、もし電信が九州に通ってなかったならば、おそらく数層倍の経費と時間を費さなければ鎮圧できなかったであろうといわれます。それはひとえに、陣頭指揮をとった伊藤博文氏の功績であります。そういうことで、伊藤氏は明治十年代のエースにのし上がってきた、というわけです。

明治10年における
電信動脈網

関東を中心とする電信網概略図

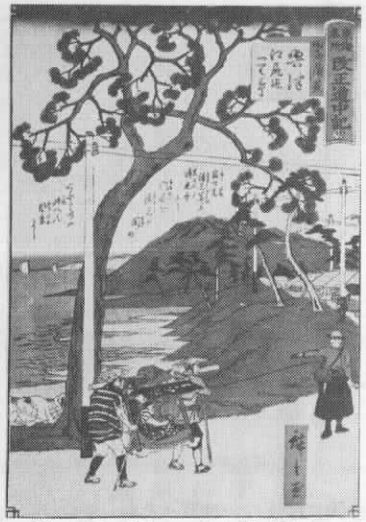


(明治17年当時)

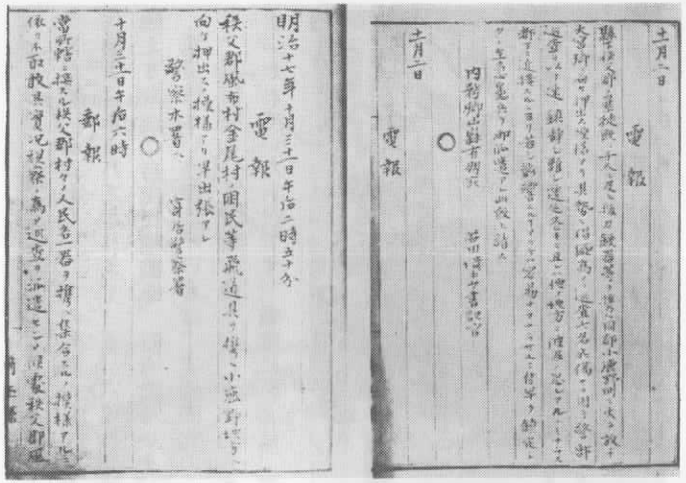
ところで、『関東電信電話百年史』を読むと、明治八年までにともかく縦断をした電信網は、アバラ骨が横に通るように、この列島の県庁所在地、主要な都市に、横に伸びていきます。それが十年代前半に果されております。五、六年の間です。なぜそれほど急がれたかというと、明治十年代の、燃えさかった自由民権動を、ひらたくいえば、抑圧する武器として横に拡がったのでありましょう。

電信柱というのは、いわば、文明開化のシンボルとして、民衆の中に迎え入れられました。今でも、電信柱という言葉を使うかどうか知りませんけれど、私の子供の頃は、電柱も含めて、電信柱といわれていたわけです。厳密にいえば、電灯線のことではなくて、電報電話の線が電信柱であります。ところが、電灯線までひっくるめて「電信柱」といわれておりました。電信柱にトンボが止っている、と私たちは子供の頃いいました。なぜ、電信柱という言葉があれほど強烈に残ったかというと、明治の初めに、全国津々浦々に一勢に電信柱が建った為に、それが文明開化のシンボルとして庶民の言葉の中に定着したのでありましょう。

ところがその電信柱というものは、むろん税金、国費で建てられたものでありながら、



I—10　アンバランスな文明開化を対照的に描いた当時の錦絵。



Ⅰ—11　電報は「暴徒」鎮圧に一役買った。

公用電報というものは無料であります。つまり、政府機関が使う電報というものは無料なのです。ところが民間の電報というのは、非常に高い料金を取りました。そういう形で発足しております。しかも、初期の電報は警察署で扱っています。窓口が警察署であります。警察署に電報を打ちに行く筈はありません。そうすると、ほとんど官の為に電報は使われていたのであります。

先に申したように、秩父事件においては、七千通から八千通使われたと想定されます。これを字数計算して、当時の米価に換算すると、いわゆる暴徒と称される秩父困民党が高利貸から醵出させたお金をはるかに超える額であります。電報ひとつをとっても、そういうことであります。

今残っている電報を見てみますと、「至急、牛肉五十貫送レ」、「饅頭、三百箱送レ」、「日本酒、何石送レ」というような電報が含まれております。そ

れはすべて、出動した東京鎮台兵の為に、至急中央から支給されたものであります。

牛肉を食い、饅頭を食って、日本酒を飲んでいたら、そりゃ、粟、稗しか食えない人間よりは、はるかに力が出ます。というわけで、四日間で秩父におけるコミューンは崩壊するのですが、そういうように電報は使われたわけであります。

六　国の非行と峠の廃道

ところで、私は理科のことはよくわからないけれども、電信柱が建てば電燈が点く筈です。ところが秩父の山の中の古老に訊いてみますと、「電燈が点いたのはいつかな、戦後かな、わしの四十歳くらいの時だから戦争中かな」というようなことであります。つまり、電報が打てて電信の回線が引けるのに、明治の初めには電燈も点くはずなのに、秩父の山間に電燈が入ってくるのは、それから七十年後のことであります。電燈が引かれたときに、庶民がそれを電信柱としか呼びようがなかったわけであります。つまり電報と電燈の間には、七十年位の落差があるわけです。そういうこの落差が、まさにこの国の近代化の跛行の象徴ではないかと思えます。

とすれば、明治十七年に小柏常次郎なり、菊池貫平なりが、電信柱をぶちくじいて蹶起しようといったことは、まさに電報の威力を知っていたからであります。起ち上がった時に、権力は必らずこの電報をもってわれわれを弾圧してくるであろう、こう思ったわけで、これは乱暴狼藉ではあり

ません、これは敵の持てる力を正確に認識していた言葉に他ならないわけです。と同時に、津々浦々にわたって、十数年間に電信がひかれるような、そういう上による上からの、上だけの、近代化に対して、秩父事件の農民たちは、理論的にはっきりと見究めていたかどうかそれは分りませんけれど、かなり皮膚感覚として、正確に、この国が選ぼうとしている近代化に下から待ったをかけて、「異義あり」と、「もっと違った近代化の方向がありうる筈である」と主張したに違いないのであります。そういうふうに主張したもうひとつの近代というのはどういうものか、ということには、私は詳しく語る資格はありませんから、これは明日、明後日、森山先生、色川先生の学説を聴いて深めていただきたい。ただ、私は秩父事件を垣間見ると、彼らが主張しようとしたものは、そういうものではなかったか、と思うのであります。

大正時代の地図を頼りに、峠を越えて行きますと、例えば十石峠というような峠は、もう、今は別の道がひかれてしまっております。元の道は草深く、数回、私は雨の中で迷わざるを得ないような廃道になっておるわけです。その廃道を分けて登っていった時に、もうひとつの近代の追求があり得たのではないか、と、私は感じたし、そういうものを検証して、それがどうわれわれのところに生かされる、現在に生かせるか、ということは、これからのわれわれの課題でありますが、少なくとも、そういう近代のもうひとつの道が追跡されていたならば、あるいは、私が凌辱感を抱かなければならなかった、昭和二十年八月十五日は来なかったのではないか、と思うわけであります。

秩父事件については、そういうようなことでありまして、まだまだ申し上げたいことは沢山あり

ますが、いささか疲れてきました(笑)。あとは、討論等において、私は拝聴する側にまわりたいと思います。以上です。

一九七五年十月二十八日